

03

切子

江戸切子と薩摩切子が有名です

四季の変化に富む日本には、季節に合わせて食器を使い分ける文化があります。夏の食卓を彩るガラス器のなかでも、切子の細やかなカットから生まれるきらめきは、爽涼感を演出してくれます。

切子は、ガラスの表面に、金属や砥石の円盤を用いて様々な模様を切り出す技法です。一般的なガラスの原料は、おもに珪^{けい}しゃという砂、炭酸ナトリウム（「ソーダ灰」ともいいます）および石灰です。窓ガラス、びん、食器などに広く利用されているガラスは、「ソーダ石灰ガラス」と呼ばれるものです。酸化鉛を加えた「鉛ガラス」は、カットを施すと水晶（クリスタル）のようにキラキラと輝くことから「クリスタルガラス」とも呼ばれ、高級食器や装飾品などに使用されます。また、ホウ酸を加えた「ホウケイ酸ガラス」は、耐熱性や耐薬品性に優れることから、耐熱用品や実験用器具などに使用されます。切子には、ソーダ石灰ガラスまたはクリスタルガラスが用いられます。

日本の切子は、1834年に、江戸でガラスを商っていた加賀屋久兵衛が、ヨーロッパのカットグラスをまねてガラスの表面に彫刻を施したのが始まりと言われています。この「江戸切子」に対し、幕末から明治初頭にかけて薩摩藩（現在の鹿児島県などを

治めた藩）の殖産興業の一環として生産されていたものが「薩摩切子」でしたが、財政的な事情や薩英戦争（1863年）、西南戦争（1877年）などの動乱によって途絶えてしまい、現在の薩摩切子は後に復刻されたものです。

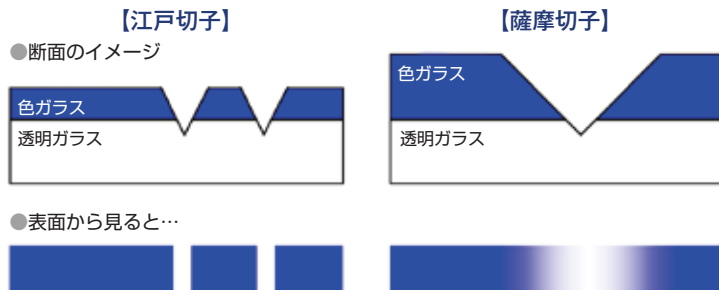
江戸時代には、江戸切子には透明の透きガラスが、薩摩切子には透明ガラスの表面に色が着いたガラスをかぶせた色被^{いろま}せガラスがおもに用いられました。現在の江戸切子には、色被せガラスがおもに用いられています。ガラスをつくる際、原料に金属酸化物などを加えると、その種類などによって、それぞれ異なる色のガラスになるのです。例えばソーダ石灰ガラスの場合には、金、銅などを加えると赤色に、コバルト、銅などを加えると青色に、クロム、鉄、銅などを加えると緑色になります。カットを施したところに現れる透明ガラスとの色の違いが、作品に華やかさを添えています。

また、江戸切子は厚さ1mm以下に色をかぶせて鋭い角度でカットすることによって色のコントラストを効かせるのに対し、薩摩切子は厚さ2～3mmに色をかぶせて緩やかな角度でカットすることによって色のグラデーションをつけるなど、技法の違いがそれぞれの持ち味になっています。

(平成22年6月)



江戸切子



協力：東京カットグラス工業協同組合 <http://www.edokiriko.or.jp/>
一般社団法人日本硝子製品工業会 <http://www.glassman.or.jp/>